

生かされている命を輝かせて

仙台教会 川野美幸さん

川野美幸さんは、平成18年に膠原病を発症。闘病しながらも結婚し、一児をもうけたが、薬の副作用でさらにうつ病を患ってしまう。4ヶ月の入院後、「何もできない自分は家族に迷惑をかける」という思いから、両親のもとに帰り、魂の抜け殻のような日々を過ごしていた。仏教を共に学ぶ仲間の助言で、いつも支えてくれる多くの人の温かい存在に気づき、前を向いて歩くことを決意。そして、夫と息子が待つ自宅に戻る。笑顔の二人を見て、「生きていてよかった」と涙が溢れた。母親として、妻として、健康な人と比べると、できないことも多い。けれども、家族三人で食卓を囲めること、「おはよう」と笑顔であいさつを交わせること、わが子の寝顔を見られること…。そのどれもが尊く、ありがたいことなのだと感じ、「不安を抱くよりも、与えられている環境のすべてに感謝をしていこう」と心が定まった。



ほんとうの自分に帰る

ほけきょう
法華経の「授学無学人記品」に、釈尊が「子・羅睺羅に對して、「羅睺羅の密行は 唯我のみ能く之を知れり」と称える一節があります。

そう称えられたのは、舍利弗をはじめとする先輩たちの指導や助言を素直に聞き、謙虚になつて、人が見ていないときでもひたすら教えを学び実践しつづけたからだ、私は思います。釈尊の長男として生まれ、世俗にあつたときには、父である釈尊に「王宮の財産を私にください」と語つた羅睺羅が、出家して法を継ぐことが人生の大事だとわかつたときから、身を慎み、つねに「素直であらう」「謙虚であらう」と心して、ただただ静かに精進を重ねる姿勢が、「密行」、つまり羅睺羅の努力だつたと思うのです。そこには、財を貪る心も、自分の境遇を恨む思いも、釈尊の肉親であることを誇る気持ちもありません。「密行」を重ねるなかで、羅睺羅はすべての人が生まれながらに授かつている仏性の有り難さにめざめ、貪・瞋・痴などの煩惱を離れた、「ほんとうの自分」に帰つたということです。そしてだれもが、その真実の自分に帰ることができません。お互いさま、素直さと謙虚さを忘れず、一日一生のつもりで、精いっぱい明るく和やかな一年にしてまいりましょう。

立正佼成会